分枝 branching 19-20

http://branching.jp
ブランチング21 発刊2017年　6月9日
ブランチング22 発刊2017年　9月9日
ブランチング23 発刊2017年　12月9日
お問い合わせ・入稿先　system@branching.jp

奥より求むものを描くことに就いて

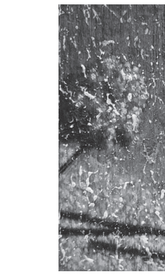
Bun TAKAHASHI 1977-
たかはしぶわ

人は頭の為にては生かず、心にても生く。頭のみこて描きし絵は糸しのみなるまばかりなり、全くなり。

糸しの描かむとすることは大事なるべ。糸しの奥があらはることが大事なり。

糸しに就いて何事かたづゆ、糸しの応めて云はく、糸にあらはれけり、糸が我なるか糸、と。

ただ石ばかりこころにしむるもの、憎くもの、奥より求むものをこそ糸に描くべけれ。



わたしの世界　アクリル、10×10センチ程、2016年制作

たかはしぶわ Biwa Takahashi
画家
1972年東京都生まれ。長野県在住
長野二紀会会員　日本パンダン党党員
1997 武蔵野美術大学油絵学科卒業 2006.7～「現代さべつ」にて「さべつと多様現代」
飛酒酒展（2008年7月から4酒に一週の展覧）2007 倉敷毎日新聞社奨励賞イラスト担当
たかはしぶわのページ http://takahashibiwa.web.fc2.com

第13回春季二紀展　2017年3月10日～18日　東京都美術館

月夜

Shigemichi BINNAKA 1941-
備仲臣道

月が出ていた。大きな白い満月が空の中心にあって、道はかりか辺りの景色までもみんな白かった。右には道車の線路がまっすぐに走っていて、道との境は柵で仕切られている。もとも と白く使ってあるのか、月の光のためなのか、それは知らないけれど、まっ白な線標の列がどこまでも続いているように思われた。反対側には家並みがひしめいて、どの窓にも明るい灯が見えずに寝静まっているのは、もうかなり遅い時刻だからである。李朝白磁の白さにいろんな表情があるように、かすかに青かったり暖かく淡い朱色だったりして、月下の家々はひっそりと息をしていた。

月の光は小さな粒になって舞い落ちてくるようで、視界のすべてがきらきらとしている。じっと道ばかりを見つめて歩いていると、いつの間にか自分の足音さえ聞こえない、深いところへ降りていくかのようにも思えた。最後の夜に見る風景としては、おあつらえ向きと言っていい美しさである。

白い道を踏みしめながら歩いてゆく、この先のひかずかに青黒い森の辺りに、今夜の目標がある。右の手をコートの下に入れて、胸の上を押さえてみると、確かに硬いものがあった。しかし、この匕首は武器ではなく、失敗したときの用心のためである。

目標は現役機の中軍にいる要人で、今夜は女と二人で隠れ家にいるのだと聞いてきた。いつもは何人もの屈強な護衛に囲まれているのだが、ここへやってくるときは決まって一人である。隠れ家の周囲のどこかに監視の目が光っていないということは、そこを受け持つ新聞販売店に潜入した若者の、時間をかけた入念な調査によって明らかになっていた。

彼の寝所に忍び込むのが早いか、たちまち決着をつけなければならないのは言うまでもないが、目標のほかに誰がいようとも、殺すのはもとより、傷つけてさえもいけない。それがこの世界の正統な掟であって、無差別に人を殺すのは邪道である。人間の解放という崇高な目的のために、最も非人間的な殺人を手段とするからには、自分もまた死ぬのだということを受け入れたうえでのことであり、その前に、こんなにも、がんじがらめに独裁的強権に押さえつけられていては、こういう手段のほかには道が残されていない、そこまで追い込まれているとも、同様な認識があった。

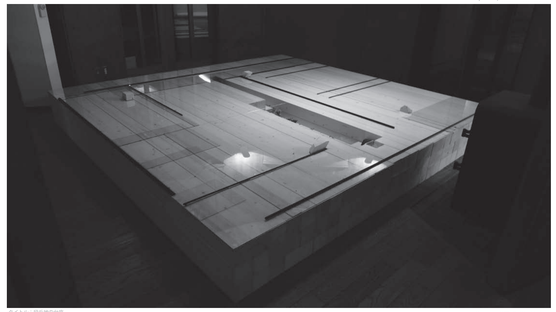
目標の液に喉をゆわるのは匕首ではなく銃の弾丸であって、それは腰の後ろの革のケースに納めた拳銃に装填されている。ウェルギウス二二口径は、もとは金持ちの護身用だったらしく、銃身も優美で軽量にはもちろん、弾倉を覆むにくるまれた部分も、銀幕をくり抜いて作られ、手の平に入るほどに可愛い。木の鞘や滑革にくるまれ銀かい、いかにもイタリアらしい装飾な毛彫りの文様で飾られていた。

腰のケースからベレッタを抜いてみると、月の光を跳ね返して、銀色の小さな粒が辺り一面へ無数に散らかった。やがて、道も家も線路の柵も、そうして、月さえも銀色に染まって、すべてはベレッタに彫られた銀展に見えた。雪が降りこめたような一面の銀世界は自ら美しく輝き、右も左も上下さえもない明るさの中に、わが身は浮いていると思った。目標に向かってまた歩き出すと、足が白い地を踏まないからちょうどに沈み込み、どこまでもいつまでも、銀色の闇の中を泳ぐ人でいるのであった。

備仲臣道　Binnaka Shigemichi 1941～
韓国忠清南道大田生まれ 著述業
宇都宮一高等学校卒　山梨時事新聞記者　月刊新山制鋼業務行人
2006年、第6回内田百閒文学賞優秀賞受賞
著書『暮る朝鮮文化』（明石書店）「恩知遺民論」（出評社）「百済遺民論」（出評社）
『ある在朝日本人の生涯』（社会思評社）『内田百閒文学散歩』（皓星社・2013年8月）ほか5冊。
kazenonagure@yahoo.co.jp

灰に書く稗史のように

photo by Kazunori Kitazawa



Kazunori KITAZAWA 1949-
北澤一伯

タイトル：昭和の作家
素材：集合材、ガラス、鉄鋼材、砥石、和、電線
サイズ：300x300x40cm
場所：アンフォルメル中川村美術館アトリエ棟
http://www.informelmuseum.com
長野県上伊那郡中川村

上伊那郡中川村の『中川村誌巻（原始・古代史編／中世編／近世編）』は、中世編第二節で鎌倉幕府の滅亡から南北朝対立に関わる北条時行の幼名亀寿丸の惣道地に、同村の河地郷小原の郡城館と鎌倉城数をコラムで示し、南北朝時代と中川村との関わりについて記録している。

そこには、隠遁地の伝説として伊那市高遠や伊那郡大鹿村とともに、伊那市富県風穴地時行屋敷を挙げてある。場所の特定はできないが、私の出生地である現住所である富県南福地と関係が強いと考えられる。「長野県上伊那郡誌郡史編」や 2015 年に編纂された「南福地ものがたり（南福地地名研究グループ）」にも、同様の記述を確認できず興味深い。

天竜川水域の東岸に位置しているそれらの地形より、水源涵沽湖に繋がる地殻がある事を認識したことが、中川村と私が空間的なつながりを感じる発見だった点と思う。

同時に、栄枯盛衰を繰り返す伊那の豪族の地政の、天竜川の東岸と西岸に別れ、また合流し南北へと運動するダイナミズムを想定する時、美術という西洋の思考が、極東の島国の中央に位置する伊那谷へ浸透していく道筋を考察する興味に掻かれられてしまうように思った。

日本近現代美術史を研究している北澤憲昭氏の『眼の神殿　美術出版社』による文脈という言葉自体が、日本の 1873 年ウィーン万博参加にあたり、その出品区分を決出する時、ドイツ語の Schöne Kunst の訳語として「美術」と造語した物だと線密に論証している。

また、日本の絵画は「唐絵—倭絵」というように、中国の絵画との対比で存在してきたが、アメリカの美術研究家アーネスト・フェノロサ（1853–1908）の 1882 年に英語で行った講演と、同年出版した『美術真説』をきっかけとして、「日本画」という言葉が生まれたという。北澤氏は講演の関係資料の中に「Japanese Pictures」という語を見つけ「日本画」とは英語からの翻訳語であったと類推している。

つまり、「西洋画（油絵）」との対比で「日本画」という翻訳語が一般化されたわけだが、そのきっかけが翻訳語の使用だった事を重視して、明治以後の近代国家形成近代思想の展開、もしくは資本主義の形成とパラレルな関係で「日本的な美術」に形成されたと考えられるというのだ。

折口信夫に句碑のある井上井月に「灰に書く稗史のように」という俳句がある。囲炉裏の火書でアルファベットを書いたのだろうか。伊那谷の山村生活に、文明開化の時流で西洋が進入してくる様子を活写して余なるにかを感じる。

稗史とは正史には書かれない歴史書のことだが、どこかで灰に書かれた物語を読むような連想を日本美術史の間隙に持つのは、西欧も極東も、私が依って立つ場所への眼差しよりも、高く浮いて流れて観えるためだ。

亀寿丸隠遁の屋敷跡を探して迷い込んだ四穂川上流の平路。森林の起伏には耕作地であったことが認められる。

昭和 36 年の三六災害における四穂川の氾濫は多くの事物を押し流した。現在、七百年の歴史をもつ落人集落といわれた四穂は無住の谷である。幾つかの跡地に残された石碑などを見るにつけ、いかなる天地にも粗末にできないものの存在を感じる。

流動と流天の場所を内包する段丘地。立ち上がる地形と地質から開望できる風景の前にたつ時の空間感覚は身震いするほどである。

中川村誌を手がかりに場所の記憶を神史史として把握し、自分自身の内面と共有できるインスタレーション／形刻を組立てる。場所はアンフォルメル中川村美術館アトリエ棟。建築家・毛綱毅曠（1941～2001）設計の建築物の内部である。

北澤一伯 Kazunori Kitazawa 1949 年長野県伊那市生れ
発表歴
1971 年から作品発表。74 年（台座を失なった後、台座のかわりを、何が、するのか）形刻制作。80 年より農村地形と（場所）論をテーマでインスタレーション「回廊地（いにょうち）」制作。94 年以後 2008 年 12 月までの 14 年間、個展と記憶の対話を、「ことの内面」と題して表現空間に変える。
「石」をめぐって　「ちんぐをうさぎ」連作を制作。同期間、長野県安曇野地区による医術にはみなかや、その家の内部を「ことの内面」の動きに従って空間することで、「ことの間」をトランスフォームする「石」ー連作「残存の表」連作、その他、長野県内外を主と標題による「敬模模」連作として 1998 年下伊那郡高森町「大鹿村子供館」及び飯田プロジェクト、が挙る。地域風景所に下がる新解釈と「ことの間」をトランスフォームする「石」ー連作「残存の表」連作、その他、長野県内外を主と標題による「敬模模」連作として